

福島県南相馬、宮城県へ視察にいらしてきて

2015年9月25日～27日のレポート

2015年11月10日 郵政産業労働者ユニオン練馬支部 吉澤 利夫

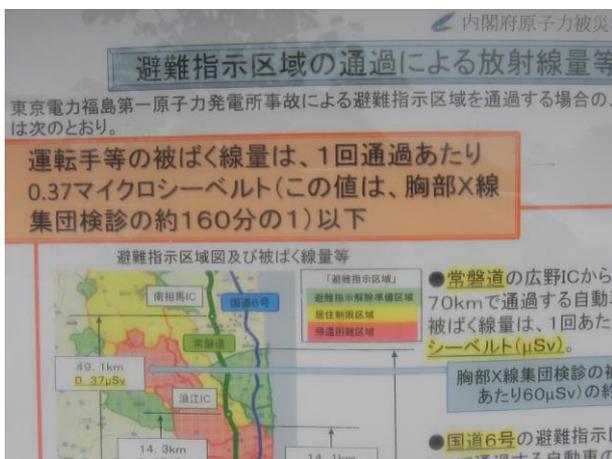
甚大な被害をもたらした2011年3月の東日本大震災から4年7カ月が過ぎました。「震災関連死」を含めた死者・行方不明者は2万1000人を超え、今なお約19万9千人が厳しい避難生活を強いられている岩手、宮城、福島の被災地3県。原発事故が重なる福島県はその内の半数以上の約11万人が避難生活を強いられています。9月6日に報じたNHKの震災特集によりますと、仮設住宅に暮らす人は現在17万人、1995年の阪神大震災の時には5年で仮設住宅に暮らす人はいなくなりましたが、東北3県は7年以上かかるとしています。仮設住宅は土台工事が充分に行われていませんから2年～3年が限度です。そのために床のゆがみやカビは深刻になっています。

震災後私たちは毎年被災地を訪問し、ボランティアを行っています。大震災が起こった2011年は宮城県石巻市に3回行って瓦礫や泥水の撤去作業等を行いました。参加しているメンバーの中には石巻市に5回いった人もいます。去年は福島県と宮城県の仮設住宅を訪問し、食糧等を届けながら要望や話を聞いて行政に声を反映させてきました。今年は被災地を忘れてはならないことを目的に視察と観光に行ってきました。今回の参加者は被災地に行くのは初めてという20代の青年、福島の原発被害を見るのは初めてという4人を含めて8人です。この8人で二泊三日の日程で福島県南相馬市と宮城県南三陸町、石巻市に行ってきました。この視察に向けて練馬局に働く労働者、練馬区内に働く郵政労働者、郵政産業ユニオン東京地本の組合員、練馬労連の役員等に募金を訴えました。募金を集めている過程で茨木県の鬼怒川の堤防が決壊し、それへの義援も合わせて行うこととしました。多くの人の協力で約90名から8万円集まり、この募金の7万円は福島県南相馬市で活動している現地のボランティアセンターに届けてきました。1万円は茨木県常総市のボランティアセンターに送り被災者に役立ててもらおうこととしました。

例年だと深夜に出発していましたが、運転手のことを考えて今回は25日の朝6時過ぎに練馬駅北口ターミナルを出発し、外環道、常磐高速道路を使って南相馬市にある道の駅「南相馬」を目指しました。2時間に一回程度の休憩をとりながら走り続け福島県の四倉サービスエリアに着きます

(四倉サービスエリアの掲示)

(請戸地区・2015年9月25日)



と、「広野～南相馬区間の放射線量は0、2～4、4マイクロシーベルト」という看板が目に入りました。ということはこの区間は放射線量が高いことを示しています。高速道路にもモニタリングポストによって放射線量の数値が表示されています。原発にもっとも近い大熊町は3、529マイクロシーベルト、更に走っていきますと双葉町は1、346マイクロシーベルトでした。風の強い、弱いで放射線量が高かったり、低くかったりします。富岡町、大熊町、双葉町の区間は放射線量が高いためにバイクの通行は禁止です。窓を閉め切った車だけが走れる区間であることは昨年と同様です（並行して走る一般道の国道6号線はこの区間14キロあり、バイク、自転車、徒歩は禁止です。国道からの脇道の全ては鉄柵がつくられ通行止めです）。

高速道路から国道6号線に出て南相馬市に向かっていきますと、3年前と同じ風景が目に入ります。閉鎖されたコンビニ、ガソリンスタンドの前には人間の高さくらいの雑草が生い茂っています。ラーメン屋、食堂の看板の色は変色し、1階部分が津波で流されて骨組だけが残っています。畑や田んぼは一面雑草です。秋になっていることもあってそれらが灰色に見えます。

道の駅「南相馬」に12時近くに到着し、昨年と同様に地元で「9条の会」で活動している志賀さんに南相馬市を案内してもらいました。志賀さんが話してくれた内容は昨年書いた内容にダブらないようにして、その後の変化を書いておきます。浪江町に入る場合には昨年と同様に事前に町役場から発行する許可証が必要です。その許可証には入る日にち、車のナンバー、車種、車色、参加する氏名が記載されています。それを進入禁止のところに立っている監視員に掲示し、許可されて初めて入ることができます。このように事前に連絡して許可をえなければ私たちのような部外者は浪江町に入れないのです。それだけこの町はいまだに放射線量が高いのです。

車は浪江町の中心街に入る前に海岸に近い田んぼに向かいます。昨年きたときには田んぼに壊れた車が数台横転していましたが、片づけられていました。田んぼには稲はなく一面人間の高さくらいの雑草が生い茂り、根っこをもつ木もあります。志賀さんは事故のあった原発から7キロ地点のところで、「ここは震災前には家が約130軒あったところで3メートル以上の津波によって流されました。あそこに見えるのが福島第一原発で事故のあった鉄塔部分です」と説明を始めます。最近の話として、震災から4年以上も過ぎますと国道6号線に猿やイノシシが我が物顔で出てきて人間を怖がりません。逆に人間のほうが怖がっています。政府は原発の再稼働を行うとしていますが、福島で収束の目途も経ってないし、避難生活を余儀なくされている人が約11万人もいるのに何で再稼働するのか、再稼働することは福島のことを忘れ去ることだと怒っています。また、南相馬市

(原発事故現場から7キロ離れたところからの鉄塔部分と志賀さんが説明しているところ)



2



では政府の安保法制—戦争法案に反対する決議をあげました。その理由は、震災当時は多くの自衛隊員に大変お世話になりました。その自衛隊員を海外に派兵し、戦争で死なせるようなことをさせてはならないと自民党の議員も賛成し、決議をあげました。被災地ではどこでも自衛隊員が活躍し、自衛隊員に多くの方が助けられたのです。その恩は絶対忘れないし、その恩に報いるために決議があげられたのです。

この話を聞いて震災当時のことと最近茨木県で起こった鬼怒川の決壊のときにも自衛隊員が奮闘していた様子を思い描きました。そして、自衛隊員の役割は国内で起こる自然災害や海外で自然災害が起こった時に人道支援で力を発揮するべきであって戦争に参加させるべきではないことを改めて強く思ったのでした。

志賀さんは続けます。浪江・小高原発を造るときに持ち上がった平成12年頃の話です。地区に130軒の家があって3軒が原発に反対しました。原発を造る所に土地をもっていた人は東北電力に土地を買ってもらいました。金額は4000万円～5000万円だったと思います。土地を提供しなくても原発をつくることに賛成する人にはお金が配られました。そして、反対した人に賛成している人からは挨拶がされない、口もきかないことが5、6年続きました。ひどいものでした。原発に賛成し土地を売った人は4000万円の御殿を海岸に近いところに造りましたが、今回の津波で全部流されてしまいました。今は仮設住宅です。今になって賛成した人たちは反対した私たちにあうと申し訳なさそうな顔をしています。「あなた方の言う通りだった」と言ってくれます。原発は金と学校教育で人間を支配し、人間関係をずたずたにしています。ここに残っているのは60代、70代の人ばかりで若い人は帰ってこないでしょう。住むことができないのですから……。

なお、浪江・小高原発は震災後の2013年12月に建設を断念し、今は鉄塔だけが建っています。福島県議会が震災後の翌年に市民団体が求めた「福島県内の全ての原発廃炉」の声に応じて決議をあげたことによります。建設を断念させたことは市民の勝利ですが、東北電力はこの土地を手放したわけではありません。安倍政権になってからは原発の再稼働と原発を新設する動きを強めていますから今後も注視が必要です。

志賀さんの説明は多くのことが話されました。それをまじえながら原発事故と現在の状況を概括的に書いておきます。

① 今回の事故に関して東電は「想定外の事故、想定外の津波」と言って原発事故は東電に責任がないように言っています。しかし、東電は今回の地震が起きる3年前に過去にあった地震津波

(原発事故現場から7キロ離れたところ)



をもとに試算したところ15、7メートルの津波がくることを想定していたのです。この試算は政府の地震調査研究推進本部（地震本部）が2002年に過去の津波地震をもとに東北沖に巨大な地震と津波が襲ってくることを予測し、それに備えるように指摘されたことから行ったのです。試算は行いましたが、津波に対する工事は行いませんでした。そのような地震と津波がいつ発生するかわからないのに工事をする必要はないというのです。要するに住民の生命と安全よりもコストを重視したのです。3年前の試算に基づいて津波への対策工事を行っていれば原発事故は避けることができたのです。この問題は過去に国会でも取り上げられました。共産党の吉井参議院議員が2006年3月に「津波は10メートルかもっと高い場合がある。水没に近い状態で原発の機械室の機能が損なわれる」と質問したところ、東電は「原子炉を冷却できる対策が講じられている」と事故は起きないと強弁したのです。原発は事故が起きないという安全神話が自らを盲目にし、その盲目が対策を行わずにきたのです。今年の8月末に国際原子力機関は「日本では原発は安全という思い込みが浸透していた」と指摘しました。国際原子力機関さえ東電の体質を疑問視したのです。そうした意味でも今回の事故は人災の何物でもありませんし、東電の責任は重大なのです。

- ② 福島原発事故は政府の発表でも広島に落とされた原爆の168発分の放射能が放出されました。そのために長年住み続けたところから避難した人は約11万人、その後避難解除されて帰ってきた人がいますが、現在でも約10万人以上が帰宅できていません。事故から4年が経った時点で福島県の資料によりますと、震災による人的被害は全体で3787人、そのうち原発関連死が1959人になっています。地震、津波で亡くなった時より原発関連で亡くなっている人の方が多くなっています。その内で自殺者は2011年6月以降10人、2012年13人、2013年23人、2014年15人、2015年は5月末までで8人、計69人になっています。他の県では震災関連の自殺者が減っているのに福島県が増え続けているのは原発事故による将来の生活への不安、原発事故の収束が一体何年かかるのか分からないことへの不安、いつ自分の家に帰れるか分からないことへの不安、20年後、30年後にがんや白血病になってしまうのではないかというおびえ、なれないところでの生活で精神的にもストレスが極地に達している等によって自殺に追い込まれていることが考えられます。

(請戸地区・2015年9月25日)

(小高の中心街・2015年9月25日)



③原発事故の収束に向けた作業員は7000人います。原発事故から今年8月末までに福島第一原発で働いた人は延約4万5000人、累積被曝線量5ミリシーベルトを超えた人は今年8月末で2万1000人に達しています。劣悪な労働環境の中で原子炉の廃炉に向けた作業、汚染水の処理を行っていますが、2014年度に起きた労災事故は64人で前年に比べて倍増しています。現場を指揮する熟練労働者が減り、現在半数以上が作業経験半年未満です。今年も第一原発で2人が作業中に亡くなり、8月には猛暑の中の過酷な作業で3人亡くなっています。東電は危険手当を1日2万円から8万円払うとして下請けに出していると言っていますが、元請け、孫請け等多重下請け構造のもとで実際に作業を行っている人に危険手当が支払われているような金額ではありません。廃炉させるまでに40年以上かかることから原発に働く労働者の待遇改善と健康管理は急務ですが、そのようになっていないのです。福島原発事故を担当する弁護士によりますと、2011年秋、週5日働いて手取り25万円でしたが、今では20万円程度です。東電のコスト削減に伴って入札の拡大が賃金の引き下げになっています。原発労働者の被曝限度は事故前には平時作業で年間50ミリシーベルト、事故発生時の緊急作業で100ミリシーベルトまでと上限を定めていました。その上限を2011年3月15日、政府は緊急作業につく場合には250ミリシーベルトまで被曝を容認したのです。原発労働者の健康、生命よりも事故収束のために作業員の被曝を容認したのですから驚くべきことです。被曝限度を超えると離職しなければなりません。そのために雇い主から線量計に鉛カバーをつけて作業につくよう指示されて被曝限度を超えないような働かせ方がされています。逆にここで働き続けていくために被曝限度をこえないように自分で線量計を操作する人がいます。全国からきていますから様々な人がいるのです。健康管理については原発作業期間中は政府が定めた健康診断を無料で半年おきに受けられますが、離職してしまえば健康診断を受けることができません。離職後も全国どこにいても定期的に健康診断が受けられるよう政府と東電に求めていく必要があります。先日の新聞に原発事故の収束作業で働いていた労働者が労災認定された記事がありました。記事には今後も労災事故が増えていくとしており、それだけ劣悪な労働環境で働いていることに他なりません。しかし、原発労働者の中には労災が受けられるのを知らなかった

(浪江町の中心街・2015年9月25日)



り、あきらめたりしている人がいるといいます。引き続き労災問題にも注視していく必要があります。

- ④子どもの甲状腺がんに関しては、18歳以下の子ども約37万人を対象に検査しましたが、実際に検査を受けたのは約30万人です。甲状腺がんが確定した人は103人、疑いのある子どもを含めると126人（2015年9月8日現在）になっています。子どもの甲状腺がんの国際的発症水準は100万人に1人か2人です。30万人から126人も出たということは普通では考えられない発症率になっています。今後も甲状腺がんや白血病等の患者が増えていくことが考えられます。10月21日の新聞に、「福島県民46万人を調べた外部被曝の推計調査では、事故後4カ月間で5ミリシーベルト以上被曝した人が原発作業員以外に約950人、被曝した一般住民ががんを発症しても治療費や休業補償が支払われる仕組みはない。甲状腺がんについては、放射能の影響を受けやすい18歳以下の住民には公費で検査が行われ、甲状腺せんがんが見つかった際の治療費も自己負担がない」と書かれています。政府と東電はこれだけの事故を起こしたのですから18歳以上の人にも治療費の負担を行うべきです。
- ⑤原発事故は被災者の暮らしと生業を根底から破壊しました。賠償の面では避難指示が出されて避難している人には一人当たり原則として月10万円の避難慰謝料が支払われています。この金額では避難生活の不自由さや苦勞に対する金額としてはあまりにも低い金額です。この賠償も廃止に向けた動きが始まっています。避難指示が出されていない地域には賠償がありませんから自主的に避難している人には出ていません（自主的に避難している人には家賃補助が福島県からでています。その補助は2017年3月で打ち切りです）。地域指定の境界線によって、道路一本隔てただけで賠償されたところと賠償されないところが出ているのです。政府の賠償指針によって被害者の分断がつくられ、被害者の間に意見の対立が生まれてしまいました。これらの対立を乗り越えて全ての被害者が団結して政府と東電の責任を追及するための裁判が2013年2月から始まっています。裁判では原発事故は平穏な生活を奪ったものであり、平穏な生活を返してほしいという切実な要求が掲げられています。そして、原告3800人は一律一人月5万円の慰謝料を請求しています。また、東電元役員3人を起訴する裁判が今年から始まります。この二つの裁判は被害者を救済させていくと共に、政府の原発政策を変更させていくためにも重要です。

(請戸小学校で説明する志賀さん・2015年9月25日)



政府は2015年6月、福島復興指針を改訂しました。その内容は賠償収束宣言ともいえるものです。しかし、浪江町などは避難解除されていませんし、避難解除された地域でも1割程度しか帰ってきていません。インフラなどの生活条件が回復していませんし、8割以上が帰っていない状況は原発被害が続いているとみるべきです。むしろ、悪化しているとみるべきです。これは賠償を続けていけば復興がすすまないという考えからきているようですが、賠償と復興を対立的に捉えるのではなく、復興をすすめながら被害に対して適切な賠償をすすめていくべきです。人間が普通に暮らせる場所の基準は年間1ミリシーベルト（毎時0.23マイクロシーベルト）です。しかし、福島では20ミリシーベルトの場所が、賠償や健康調査を継続する保障もないまま帰還対象とされようとしているのは許せるものではありません。

これ以外にも様々な問題があります。今後も政府と東電の動き等を見ていく必要があります。

次に請戸港に近い請戸地区に移動しました。請戸地区は津波に襲われたままの大きな家が数軒残っています。昨年きたときには陸に上がっていた大小の漁船、溝に落ちたままの車等は片付けられていました。後に残っているのは何百軒もあつたであろう家の土台コンクリート、荒涼と広がる風景と人間の高さ以上の雑草です。その雑草は時々吹いてくる海からの強い風にあおられていました。9月のこの時期は寒さを感じませんが、地震と津波のあつた3月11日は寒い日で東北地方の夜は雪になったと聞いています。その日は海からの強い風と合わせて考えますと極寒だったと思います。請戸地区では震災前は家が約560軒あり、震災と津波によって183人が亡くなりました。ここは原発事故が起こつた翌日に放射能が襲ってくるのが知らされて地区全員に避難命令が出されました。それが全てに優先されたことから被災者を救助できませんでした。亡くなった183人の中には瓦礫等の下敷きになり、泣き叫んで必死に救助を待っていた人がいたのです。極寒の中で何日も置き去りにされたのです。何十日か経って片付けに入った時には見ることができない死体、中には白骨化していたといいます。このことはテレビでも取り上げられていました。そのテレビで消防隊員は、避難命令が出されなければ多くの命を救うことができたのにできなかったことに自分を責めつづけていました。消防隊員は、「ここにくるとあの時に聞こえた『助けてくれ』の声がよみがえってきます。目の前で助けを求めて苦しんでいる人がいるのに助けることができなかったのです。悔しいです・・・」と話していました。東電の起こした原発事故は救うことができた命を

(請戸小学校の2階教室内で・2015年9月25日)



のです。悔しいです・・・」と話していました。東電の起こした原発事故は救うことができた命を救うことをできなくさせたのです。

車を少し移動させ請戸小学校に向かいます。去年は裏口のところに津波によって前部分が圧縮された車がありましたが、片づけられていました。1階の体育館は卒業式を行うための看板が掲げられ、時計の針は震災時間を指しています。演壇に向かって右側の床は穴があき多くの部分が地べたに落ちて歪んでいます。この学校は海岸に近いこともあって津波が2階にも達したことが壁に残っている水の線から分かります。その線の高さを確認すると人間の膝くらいでした。ということは1階全体が濁流で覆われ、その爪痕は今も残っています。2階の教室の黒板には「この学校のことは忘れない」「こんな地震津波に請戸は負けない」というメモが一面に書かれています。それらのメモは全ての教室の黒板に書かれていました。そのメモを見ますと、地元の人が書いたものに加えて自衛隊〇部隊、東京土建〇支部、新婦人〇班、〇〇9条の会等が書かれており、地元の人はもちろんのこと全国各地からきているのが分かります。学校の図書類等は水にかかった後、乾き切った状態で教室内の机に散乱しています。この学校は地区住民の強い要望から取り壊されることなく保存が決まりました。原発をめぐる視察ではこの学校は多くの人が案内されています。先日(10月16日)も168回目を迎えた毎週金曜日の原発反対官邸前行動に参加していますと、福島で請戸小学校に行ってきたことをステージでスピーチした人がいました。スピーチされた人は請戸小学校の今の状況を述べた後、浪江町から東京北区に避難されている人がいて、その人と一緒に浪江町の家を掃除するために定期的にいつている。定期的に足を運んでいることによって福島原発事故を忘れてはならないことを自分に言い聞かせている。みなさんも現地の状況を見にいつてほしい、という話をしていました。私たちも頻度は少ないにしても1年に1回、南相馬には2012年から数えて4回いつていますが、今後も継続していきたいものです。この請戸小学校は電力会社の補助金で造られました。校門の壁には「電源立地促進対策交付金施設」とプレートされたものが貼ってあります。この地区は地震津波に加えて原発事故で多数の人が犠牲になりましたが、原発事故を起こした電力会社の補助金で造られた学校が唯一残ることになったのですから皮肉です。

続いて浪江町の中心街に向かいます。車中でも志賀さんは多くのことを話してくれました。その中でもこういうものがありました。「双葉町、飯館村では原発事故が起こったときに東電の社員は一番に逃げていきました。住民はというと原発は絶対安全と何十年も言われてきたから事故が起こ

(浪江町に設置してあるモニタリングポストと実際に量っていたところ・2015年9月25日)



るはずはない、国から避難指示が出されても何のことも分らなかった人もいました。避難するといっても何日もかかるものではないと思った人が大半でした。だから物ももたずに避難したのです」志賀さんの話は実感がこもっていました。

浪江町に入りますと放射線量を表すモニタリングポストがところどころに設置されています。最初に見つけたモニタリングポストは1、657マイクロシーベルトでした。実際はどうだろうかと思ってメンバーの鈴木さんがもってきた線量計で量ってみますと3、14マイクロシーベルトでした。ということは約2倍の違いがあります。町で設置しているモニタリングポストは地面からやや高い位置にあり、鈴木さんはそのポストの地面を量ったのです。このように地面に近づけると放射線量は高いのです。志賀さんによりますと、このモニタリングポストを造った人が「このような位置で量ったのではだめだ」と言っているそうです。別のところに行きますと町のモニタリングポストは1、754マイクロシーベルトでした。そこでも鈴木さんが線量計で量ってみますと4、28マイクロシーベルトでした。町の中心部であるJR浪江町駅で車を降りますと近くに新聞販売所があります。地震があったときのままの新聞が何百部も積み上がったままにあるのがドア越しに見えます。販売所のドア近くは昨年放射線量が高かったので今回も鈴木さんに量ってもらいました。すると驚くべきことに9、25マイクロシーベルトでした。メンバーからは「えっ！こんなに高いのならばすぐに逃げなければ大変なことになる」という声があがりました。そこから2メートルくらい離れた位置に変えて線量計で量ってみますと5～6マイクロシーベルトでした。その時の風や位置によってこうも変わるのですが、町のモニタリングポストは1、754マイクロシーベルトでも実際量れば4マイクロシーベルト以上になっているのです。ちなみに10月3日の新聞によりますと東京都内の新宿区は0、057マイクロシーベルト、埼玉県さいたま市は0、048マイクロシーベルトです。東京や埼玉で生活している私たちのところよりもはるかに高い放射線量であるのが分かります。志賀さんは「この町には後6年は帰れないでしょう。家の中はネズミやイノシシの寝床です」と言っていました。これでは生活できるものではありません。檜葉町は今年の9月に避難解除されて戻った人がいます。その割合は1割に達していません。川内村は昨年10月に避難解除されて戻った人は3割です。川内村に戻った80歳の方は「戻ってきても自宅と仮説住宅を行ったり来たりしている。体が弱って車を運転できなくなったら、ここでの生活は終わる」と10月24日の新聞に書かれていました。浪江町では6年後として考えた場合に住民が帰ってくる割合は

(我がもの顔で町の中心街で歩いているイノシシと線量計が示した数値・2015年9月25日)



更に少なくなることが考えられます。浪江町駅前から町の中心街に伸びているまっすぐな道に昼なのに誰もいません。脇道に入っても誰もいません。静けさだけです。山や自然の中に入った時に感じる静けさならば分かりますが、建物やビル、商店が連なっているところでの静けさは異様で不気味です。それをみて原発は事故が起こったらこれまでの生活を一変させてしまうだけでなく、人間生活を破壊するものであることを痛感します。そんなことを考えていますと、メンバーの一人が「あっ！あそこにイノシシがいる」と声をあげました。町の中心部に位置する浪江町駅前にイノシシが出たということ、それは人間がいなくなるとこういうことになるということを見事に思いました。イノシシは私たちがじっと見て他にいきませんが、一人だったら襲ってきたかもしれません。

次に事故を起こした原発から14キロ離れている希望牧場に向かいました。希望牧場のことは昨年詳しく書きましたし、朝日新聞に今年6月から7月の1ヶ月間連載した「プロメテウスの罠」でも紹介されています。牧場主の吉沢さんは不在でした。この日は金曜日で国会の官邸前行動にしているかもしれませんし、他の行動にしているかもしれません。最近耳にしたことはここで産まれている子牛の中に白い斑点が出ているのが何匹も出ているといいます。放射能がかかっている草を食べている牛ですからその影響であることが考えられます。原発の事故後、国が殺処分しようとした3百頭以上の被曝した牛が吉沢さんとボランティアの善意で今日も生きています。売ることも買うこともできない牛が私たちの目の前で草を黙々と食べています。牛舎のえさ代だけでも大変な金額になりますが、全国からの寄付によって成り立っています。また、昨年10月に『希望牧場』という絵本が岩崎書店から出されました。この本を作成するに当たっては様々なことがあったことを「プロメテウスの罠」で知りました。この本の売り上げで牧場の運営に一部あてられているということです。この本には希望牧場がつくられたいきさつと生き物の大切さ、人間が考えていかなければならないことが子どもにも分かりやすく書かれています。大人にもこの本を読んでほしいものです。昨年きたときには犬とボランティアの女性が3人でできて歓迎してくれましたが、今回は忙しかったようであえませんでした。元気にやっていることを願って小高地区にいきます。

小高地区は来年春に避難解除されるところです。新聞によりますと、今年の5月の調査で小高地区に戻るのは1割を超える程度、南相馬市に戻るというのは2割、「生活に支障がない等の条件が整えば戻る」というのを含めても5割に満たないそうです。来年春に避難解除されるとはいえ1割、2割程度では市や町は成り立ちません。車で小高を走っていると町はきれいになっていますが、小高の中心にある駅前、商店街は誰もいません。工事現場に働く人がところどころにいるだけです。

(希望牧場・2015年9月25日)



駅前の駐輪場には昨年と同じように自転車が並んでいます。事業所や会社、店が営業を始めたところが昨年よりも増えているかもしれませんが、工事関係者を相手にした店にとどまっているようです。放射線量は浪江町に比べて低いとはいえ今も住めない町であることに変わりありません。

ここで志賀さんが案内してくれたところに憲法学者の鈴木安蔵さんが生まれて育った家があります。ここには法律の専門家や学者、研究者がよく訪れているといいます。戦後、憲法をどのようにしていくべきかを定めるときに鈴木安蔵さんは戦前の反省に立って主権在民、基本的人権を入れるよう政府に求めました。それが現憲法の条文に生かされ今や主権在民、基本的人権は当たり前になっています。ということは憲法の基礎をつくった人です。小高地区は歴史に残る学者や文化人が多く出たところで私たちもそれを聞いて憲法を再度勉強しようという気持ちになりました。

他にも除染用土を入れた黒い袋の保管地になっている小高小学校にも寄りたかったのですが、夕方5時過ぎになったことから農家民宿「塔前（とうめい）」に向かいます。民宿からは酒類は置いてないので飲み物、酒、つまみ等は買ってきて持ち込んでほしいというので地元の人がやっている店を探しました。道すがら探したのですがどこもあいていないためにセブンイレブンで買って向かったのです。車をカーナビにセットして向かったのはいいのですが、なかなか着きません。電話番号でセットしたカーナビが案内したところは工事現場の更地とシャベルカーです。3台の車のどれもそこを案内します。そういうことが何回か繰り返されて同じところを何回もいったり来たりしました。これでは時間が経つばかりで着くのは夜遅くなってしまうと判断して民宿に電話して案内を求めました。しかし、私たちがいる位置が分からないために何を言っているのか分かりません。結局、セブンイレブンに戻って案内してもらうことになりました。しかし、案内してくれた車が早くいってしまったのでまたもや迷ってしまいました。案内してくれた車も遅くなっているのでも早く民宿についてゆっくりしてもらいたいという気持ちから急いだと思います。再度連絡をとって再度案内してもらって民宿に着いたのは夜8時でした。後で聞きましたらカーナビが案内したところは津波が来る前の住所で今は工事現場になっていて、その周辺を約2時間ぐるぐるしていたということです。もう少し早い時間で明るいうちに民宿を探せば宿の看板を見落とすことはなかったのです。農家民宿は普通の家が行っていますから一般的な旅館や民宿とは違って看板が小さいので見落としやすいのです。民宿に着いた時には全員グッタリし、お風呂にも入らず着替えもすることなく宿のおいしい食事で交流を始めました。質素でありながらも年輩者向けの味付けでおいしかったで

(農家民宿「塔前（とうめい）」での交流)



す。志賀さんにも夕食を一緒にしてもらって昼間の案内で話されなかったことを聞くことができました。志賀さんには案内してくれたお礼として参加者から1万円、職場等で集めてきた募金7万円はボランティアセンターに届けてもらうようお願いしました。

翌日（9月26日）朝起きますと子どもを相手に遊ぶことを目的にしたボランティア活動を行っている人にあいました。車は特注と思われる車体に子どもが喜びそうな色と絵、夢を運ぶような模様が描かれています。この車を見ていると童話の世界に入ってしまうようです。その人は「この活動はNPO法人として登録していて妹と二人で群馬県からきました。遊びは特殊なドロを使ったもので全国の学校や自治体から要望があると現地にいったりドロ遊びを教えています。今回は福島で行うのでこの宿に泊まりました。福島に来た時には毎回ここに泊まっています」と言っていました。他のボランティアにきている人もここが常宿だそうです。その人が言っていました。地震の時の津波は前にある道路まできました。そのために以前あった農家民宿は津波で破壊されたのでここに立て直したというのです。その話を聞いてこの家が新しいことに納得したのです。ここは原発事故からは離れていて放射能被害はなかったにしても津波の被害を被ったのでした。それを乗り越えて新しい家を造って農家民宿をやっていることを思うと、機会あるごとに泊まっていきたいものです。

農家民宿を8時過ぎに出発しました。今日と明日の2日間は郵政産業ユニオン東北地本の遠藤さんに宮城県南三陸町、石巻市を案内してもらいます。NHKニュースによりますと、南三陸町を襲った津波は海底の地形を大きく変えるほど凄まじいものでしたが、自然の回復力は強く特産のカキの養殖は震災前の6割に戻ってきている。その一方で、津波でヒトデが流されたためにウニが増大し、海底の生態系が大きく変わり新たな問題が起こっている、今後も復興事業を進めていくとともに、津波の検証が必要である、と報じていました。また、新聞には宮城県がすすめている復興事業は被災者が求める復興住宅等の建設よりも大手ゼネコンの利益が上がる工事を中心に行っているといっています。今年2月13日には全労連主催で被災者の生活再建を求める国会前行動が400名の参加で行われました。そこで宮城県の代表は「震災から4年になろうとしています、復興はすすんでいません。県は防潮堤をつくらうとしています、防潮堤よりも被災者への生活支援です。仮設住宅での生活は限界です。仮設は足を伸ばして生活できる場ではありません。仮設で孤独死が増えているのも人間らしい生活ができていないからです。人間らしい生活を求めて自宅を建てようと思

（ホテル海洋とホテルのロビーで打ち合わせ・2015年9月26日）



っても建築費がどんどん上がっています。それをみて建てられないと思って精神的にノイローゼになっている人もいます。今、私たちは災害住宅を速くつくって足を伸ばして生活できる場がほしいと思っています。また、仮設住宅からでるためには生活資金として最低でも500万円が必要です」と訴えていました。そんなことを頭の片隅におきながら待ち合わせ場所の南三陸ホテル観洋に高速道路を使って向かいます。約3時間走らせて気がついたのは、福島県の原発被害地域と宮城県では復興の度合いが違うことです。福島県を超えて宮城県に入りますと道路から左側の被災していないところでは田んぼは黄金色に輝いていましたし、住宅も生活しているのが分かります。福島は家があっても放射能によって住めないし、生活できませんから違いは歴然としています。

ホテル海洋は震災時にテレビで何度も取り上げられたことから知っている人も多いと思います。海洋の発行したパンフによりますと、「このホテルは震災と津波があった直後から約2年間大きな役割を果たし、復興の拠点になりました。第二次避難所として被災者600人、医療、インフラ工事関係者を含めると1000人以上を受け入れました。被災した人にはお風呂も解放して大変喜ばれました。ホテルスタッフによる南三陸の震災と津波、現状を案内する『語り部』も2012年2月から始まって2013年3月までに3万人案内しました」と書かれています。ロビーには当時の写真を見るコーナーが設置されています。テレビも当時の状況が繰り返し映し出されています。その映像をみますと震災当時のことが思い起こされ「これは絶対に忘れてはならない。風化させてはならない」ということを新たにさせるものでした。このロビーでおいしいコーヒーを飲みながら今日と明日の行程を打ち合わせした後、南三陸町防災庁舎に向かいました。

南三陸町の防災庁舎はホテルから数分で着きました。私たちが着いた時には大型バスから大人数の人が降りているところでした。鉄筋の骨組だけが残る庁舎前には多くの花が献花され、御線香があげられています。私たちも森田さんがもってきた御線香をあげて冥福をお祈りしました。私たちが遠藤さんから説明を聞いて写真を撮っていると、前に到着していた大型バスは出発し、今度は別の大型バスが到着しました。この日は土曜日ということもあって頻繁に訪れる人がいるようです。この庁舎から若い女性が命をかけて「津波がきます。高台へ避難してください」と繰り返し住民に呼びかけたことを思い起こします。この庁舎は3階建てで屋上を2メートルも超えた津波が襲ったのです。当時の新聞記事を見ますと、南三陸町は15メートルの津波だったと書かれています。

(南三陸町防災庁舎・2015年9月26日)



この建物の下から庁舎全体を見上げてみました。よく見ますとそれぞれの階には高さがあります。東京にある一般的なマンションと比べると、東京のマンションの4階以上になると思います。この建物よりも高い津波が岩手県、宮城県、福島県の何百キロにもわたって海岸沿いを襲ってきたことを考えますと津波の恐ろしさを目の当たりにしました。帰ってから新聞社が発行した当時の写真と新聞記事を読み返してみました。南三陸町の家、町並が凄まじい勢いで破壊されています。皆さんも想像してみてください。東京にあるマンションやビルの4階を超えるような津波が何百キロにもわたって襲ってきた場合にどのようなになってしまうかを……。防災庁舎は一時取り壊しをする話がありましたが、住民が残すべきだという強い要望があって存続することが決まりました。現在は庁舎を残しながらそのまわりは高台をつくるための工事が行われています。

次に車は受験生の合格祈念として県内外から多くの人が参拝にきている釣石神社を見学しました。ここは目の前に巨大な石がドーンとあり、その石は落ちそうな形をしていながらもわずかな支えで落ちないでいます。このような状態からすれば落ちてもおかしくないのに落ちないので「落ちない石」として祭られています。東北地震のときにもこの石は落ちませんでした。そういうことから受験生は昔も今も試験に落ちないようにするために祈願にきているそうです。

次に大川小学校に向かいます。車を走っていると、左側の海岸沿いは高台づくりの工事のためにシャベルカーがどこでも目に入ります。大川小学校に着きますと私たち以外にも訪ねている人が何人もいました。学校の正面前と学校裏にある石碑には多くの花が献花され、御線香があげられています。私たちも森田さんがもってきた御線香をあげて冥福をお祈りしました。石碑にはこの学校で犠牲になられた7割の生徒74人、教員10人、この町の住民の名前が彫られています。この名前の一人ひとりに人生があり、生きてくても津波によって一瞬にして命が奪われたのです。未来ある子どもの夢や希望が奪われたのです。この学校の震災に関する資料によりますと、地震があったときに教職員、生徒はすぐに避難せず校庭で50分間にわたって対応を検討した。教職員の判断は、裏山は険しく道もないので小さい子どもには歩けない。対岸の小高い場所ならば逃げられると考えて全校生徒を移動させた。その1分後に被災。津波の高さは想定外に大きいものだった。そういう中でも裏山に登って助かった子どもと教職員がいた。流される子どもの手を教職員がつかんで助かった子もいた。助かったのは全校生徒の3割だった、というものです。校庭での50分間の検討時間が悔やまれます。50分間もあったのならばすぐに逃げればよいと思うのですが、そうならな

(大川小学校・2015年9月26日)



かったのが残念です。現在、避難行動に問題があったとして大川小学校の児童23人の遺族が県と市に23億円の損害賠償を求める裁判が行われています。この裁判についても原発裁判と同様に注視していく必要があります。

これを自分達に置き換えて考えてみます。私たちに想定外のことがあった場合にどういうことができるでしょうか。私は3月11日の地震があったとき練馬区内で郵便物を配達するために路地裏でバイクに乗っていました。ある家の郵便物を配達して次の家に向かおうとバイクに乗ってT路地を左に曲がった時に突然電柱が縦てと横に揺れ電線はバチバチバチと大きな音を立てたのです。電線同士がぶつかり合う音です。地面は大きい生き物のように波をうちバイクごと身体が上下しました。その時“これは何かの間違いだ。こんなことってあるのか”と恐怖を感じました。バイクをすぐに脇に止めて数分地震が収まるのを待った後、周りに大きな被害がないことを確認してから郵便物の配達を再開したのでした。ここで問題なのは被害があった場合に郵便局員はどのように対応すべきかです。東北震災のときに郵政の職場はどうであったのでしょうか。郵政産業ユニオン本部によりますと、民間の銀行や自治体を含む事業所で郵便局は数が多いこともあって犠牲者が最も多かったそうです。中には地震後、津波がくる前まで勤務を続けていた人がいたといいます。当時の郵政の職場は災害に対するマニュアルが不十分であったことがこのような事態を招いたのです。これからは今回のような地震があった場合の教訓として防災意識の高揚を図っていく、仕事よりも人命を第一に考える意識に変えていく、そのための労働環境をつくっていく、自らの命は自ら守っていくことが必要であると教えています。そして、災害後は救助に全力をあげていくことです。

大川小学校から少し離れて学校全体を見回してみますと、学校は2階建てで緩やかなV字型をしながら校舎と体育館は横に広がっています。こういう校舎は他にみたことがありません。東京では4階、5階建てのビル校舎が多く狭く感じますが、ここでは校舎も校庭も伸び伸びしています。震災前はこの学校の周りは住宅が多くあったでしょうが、今は全部流されてありません。あの時の教職員、子どもたちのことを思うと心からお悔やみを申し上げて車に乗り込みました。

次に道の駅「上品の郷」で食事を取り、東北震災で最も被害が大きかった石巻市に向かいました。石巻市に入りますと4年前にボランティアで行った瓦礫撤去、泥はき、側溝や墓石の掃除等を思い出します。その時は全労連の災害対策センターに一泊3000円で寝泊まりして市内の各地をまわって作業を行い、現地の人から震災当時の話を聞くこともできました。悲惨な体験が多く話された

(日和山公園から見た石巻市・2015年9月26日)



15



中でも記憶に残っているのが数多くあります。一つだけあげますと、津波がきた時にはビルの一室に逃げ込んで助かったけども、その夜は雪が降ったので寒くてたまりませんでした。その後も水が引かなかったために何日もビルの一室に閉じ込められておにぎり一個でしのいだといいます。多くの方がこのような体験をしたのです。市の中心街にはとほろどほろに被災したままの家が数軒ありましたが、全体は人の行き来があり店のほとんどが営業しています。日和山公園に到着しますと懐かしい気持ちになります。日和山公園では遠藤さんの友人で地元の高橋さんが「高台にあるこの公園に登れた人は助かり、登り切れなかった人は津波に飲み込まれました。生きるか死ぬかの天地の差がここであまれたのです。海岸に近いところからここにくるのに相当の時間が必要です」と説明していました。津波が押し寄せたところの全体を見わたしますと、右も左も全部更地です。漁港は再開していますが、4年前の8月にきたときとほとんど変わりがありません。その更地ではシャベルカーを使った作業が行われています。次に車は門脇小学校に向かいます。この学校の近くにはお寺が数軒あることからお墓がたくさんあります。門脇小学校の隣にもお墓があり、ここで私たちは倒れている墓石のごみの掃除、瓦礫の撤去、元に戻せるものは戻したりしたのです。夏の暑い盛りで汗をかきながら行って地元の人にはずいぶん感謝されました。現在お墓はほとんど整備されて震災前の状態になっています。門脇小学校はビニールシートで覆われていたために中をみることができません。私たちがきた4年前は津波で教室が破壊された様子や校舎の右側の壁は油で燃えたために真っ黒になっていた状態でした。この学校の震災に関する資料によりますと、地震直後に着のみ着のままで校庭に避難した子どもたちは冷たい雪に震えていた。大津波警報のサイレンになった午後3時過ぎには裏の日和山に校舎わきの階段を上り避難。雪の寒さや恐怖で涙ぐむ子の手を上級生がとって登った。津波の時は高台に逃げる訓練をずっと続けてきたことが今回もいかされた。これらの対応によって約240人の生徒は助かった。あの日、在校生徒は助かったが、校外にいた7人は犠牲になったと書かれています。

大川小学校と門脇小学校は同じ宮城県内でありながら対応に違いがあります。やはり危機管理と日頃の訓練、とにかく逃げる必要があると教えています。

(門脇小学校前)



(津波の高さを示す信号機)



次に女川に向かいました。向かう途中に震災時に津波がきた高さを示す歩道橋と信号機があります。その高さは信号機の点滅灯と同じくらいです。海岸から相当離れている地域にも信号機の点滅灯くらいの津波がきたことになります。皆さんも想像してみてください、信号機の高さと同じくらい

の津波が襲ってきたということ。メンバーの一人が今日の夜に帰らなければならなくなったために女川駅に向かいました。駅に向かうためにカーナビをセットしましたが、そのまま走っていきますと工事の看板でいき止まりです。裏道の狭い路地を使って迂回するとコンビニがあり、そこで聞いてみました。今は道路の工事中で大きく迂回しなければ駅にいけないというのです。このようにどこにいても工事が行われていてカーナビの案内だけでは目的地にいけません。女川駅はきれいに改築されて温泉湯「女川温泉ゆぼっぼ」が併設されています。この温泉は宿泊できないにしても地元の人や観光できた人も楽しめます。電車がくる直前まで温泉に入ってゆっくりできるというのも発見です。「よーし、次回はこの温泉に入るコースを考えよう」という声があがりました。

車は女川駅から小湊浜にある割烹民宿「めぐろ」に向かいます。小湊浜に行くには山を超えていく牡鹿コバルトラインと海岸沿いの道があり、車は二つに分かれてしまいました。民宿の人によりますと駅から約30分で着くと言っていましたが、コバルトラインは暗闇で霧がたちこめてきたこともあってそれ以上の時間がかかったように感じます。海岸沿いを走った車も暗闇の中で右や左のカーブが多くて大変でした。海岸沿いは昼間は景色がいいところだと思いますが、残念ながら夜では何も見えません。民宿には両コースとも夕方の7時ころに着き待望の夕食交流です。食事は割烹民宿ということで宿泊料金の割には豪華な料理でした。「これはうまい。この地酒がうまい。これだけ多いと食べきれない」などと私たちが食事を始めていますと、主人が顔をだして震災当時のことを話してくれました。3月11日の地震による津波は前の道路のところまで来て全部流されてしまいました。3月11日と翌日は雪が降って氷点下のように寒くて眠ることかできなかったです。水は出なくなり、電気も止まって真っ暗闇の中でローソクを使った生活が続きました。お風呂はお寺からいただいた水をドラム缶に入れて沸かして入りました。外ですから入ってもすぐに寒くなってしまいました。入らないよりましです。そうしたことは電気が復旧した5月20日まで続きました。ここを復旧させるまでには全国から多くの支援がありました。ボランティアの人には大変助かりました。感謝しています。

それを聞いた私はこういう話はもっと多くの人に聞いてほしいと思ったのでした。

(割烹民宿「めぐろ」)



翌日（9月27日）、割烹民宿を出るときに地元のお土産を購入。南相馬で買った物と合わせる人によっては1万円を超えます。たとえ金額が少なくても東北でお金を使うことが視察旅行の目

的でもあります。この日は午前中牡鹿半島の御番所公園を散策し、女川原発を見て石巻市に向かいます。女川原発は道路脇の小さな公園から見下ろして屋根の部分しか見えませんでした。女川原発は今回の地震で13メートルの津波に襲われながらも福島原発のような事故が起きませんでした。事故が起きなかったのは津波対策として防潮堤のかさ上げ工事を行っていたからです。それでも津波は防潮堤の80センチまで達し、それを超えれば事故が起こっていたといいます。大きな地震が発生した場合に原子炉は自動停止します。福島原発も女川原発も同じように停止しました。しかし、自動停止した後も核燃料は核分裂によって大量の熱を発生し続けます。核燃料が入っている炉心を冷やし続けていかなければなりませんから冷やすための電源が欠かせません。津波によって電源の機能が失って起きたのが福島原発の事故です。要するに「全体安全」と言われている原発でも地震と津波には対応できないのです。そうしたことから政府の地震調査研究推進本部（地震本部）は2002年に過去の津波地震をもとに将来東北沖に大きな地震と津波が襲ってくると予測し、それに備えるよう電力会社に指摘しました。東北電力は設計の時点から独自に地震と巨大な津波がくることを予測し、かさ上げ工事を行っていましたが不十分なものでした。これ以上の工事は経費がかかることから東北電力は行いたくなかったのですが、住民や原発に反対している共産党の町会議員の追及によって造らざるをえなくなったのです。その工事の中には原発前の海の底を最深で4メートルも浚渫（しゅんせつ・水底をさらって土砂などを取り除くこと）も行っています。町会議員が「こうした海底の浚渫が行われず、浅いままだったら今回の津波は堤防を超えていたのではないかと」と問うと、東北電力は「そういうことも考えられる」という言い回しをしながらも認めています。このような運動がなければ宮城県でも福島県のような事故が起こっていたのです。メンバーの数人が「東北電力はそうした運動のお陰で事故を防げたことに感謝すべきだ」「事故が起これば損害賠償が数兆円もかかることを考えれば本当にそうだ」と言っていました。全くそうです。

このように地震津波に備えてかさあげ工事を行っていれば防ぐことができたのに行わなかった東電の責任は重大なものです。最近、女川では福島原発の事故をみて原発に賛成だった人が「これまでは原発に喰わせてもらった。この次は原発に殺される」と言って反対にまわっているといいます。

（女川町の仮設商店街復興村「きぼうのかね」・2015年9月27日）



次に遠藤さんは女川町の仮設商店街復興村「きぼうのかね」を案内してくれました。仮設で設けられていることから一つの店は仮設住宅の部屋くらいです。それが長屋のように一つの棟になっています。それが三棟あって理髪店、お茶や、飲食店、釣り具屋、果物屋、酒屋、焼鳥屋、不動産屋、

花屋等があります。町の商店街が津波で破壊されたためにここに集まって商売しているようです。時間がお昼前だったことから店は一部しか開いていません。お茶屋の前を通ると、おばあさんがお茶を飲んでいてほしいというので入ってそのまま話し込みました。お茶を飲んでいて、おばあさんは私たちが東京から観光にきてくれたことに喜んでくれました。そして、孫が東京の池袋で働いていることや地震津波のこと、今の生活のことなどを話してくれました。話を聞いて感じたことは、東北の復興支援のためには観光にきて現地の人の話を聞くことも必要ということです。東北震災は過去の話のように感じている風潮があるだけに尚更です。もう少しゆっくりしたいところですが、帰りの時間を考えなければなりません。遠藤さんとはここで別れて石巻市、東京を目指して車を出します。途中の松島で食事をとろうとしましたが、日曜日ということもあって人の多さに驚きます。そのまま走り続けて塩釜で寿司屋、ラーメン屋の二つに分かれて食事をとって東京を目指しました。福島県では国道6号線を走って道路上の鉄柵を見たかったのですが、宮城県からはかなり時間がかかることから高速道路に乗って帰ることになりました。高速道路に乗って双葉町、大熊町、富岡町の区間は相変わらず放射線量は高いものでした。双葉町での放射線量の表示は1、987マイクロシーベルトでした。ということは行く時よりも帰りのほうが高かったことになります。この区間を私たちは約80キロの速度で走っていたところ、後ろから大型のバイクが2台猛スピードで追い越していきました。その内の1台は半袖シャツで風をなびかせて走っていたのです。この区間は二輪車で走ってはならないと掲示されているのに猛スピードで走り抜けていくというのはどうということなのか、放射能が身体全体にかかってしまうことに心配はないのかと思ったのです。この区間を通過した時間は約20分です。その時間で2台ですからおそらく一日を通すと多くのバイクが走っているかもしれません。高速道路から見える景色は汚染土が入った黒い袋、雑草が生え渡った田んぼから広野町を過ぎた辺りから田んぼは黄金色に変わっていきます。四倉サービスエリアで休憩した後、3台の車が一緒に走るのは困難なので最後に寄るサービスエリア友部で再会することを決めて走り続けます。友部で車のガソリン代、高速代を精算し、参加者で割った金額は1人約1万円でした。そして、次回は来年の9月10日(土)～12日(月)に行くことを確認しました。練馬駅に着いたのは8時ころでした。3人の運転手さん、ありがとうございました。

(高速道路からも見える汚染土が入った黒い袋) (高速道路についているモニタリングポスト)



10月27日、反省交流会を行いました。交流会には今回東北にいけなかった人も参加してくれて様々な意見が出されました。そこで出された意見を列記し、今後に活かしていきたいと思います。

○ボランティアとして作業や仮設住宅に訪問して話を聞いてくるのも大事だけでも、今回のように視察も大事だと思う。民宿を使って東京からきたと言うと地元の方は喜んでくれている。それが現地の人の励みにもなっている。現地を知ることも大事なので今後は気軽な気持ちでいって支援していくことが必要と思う。気軽な気持ちでやれば参加する人も構えることなくいくことができると思う。次回もそういうことでいいのではないか。

○2軒目目に泊まった民宿が料理も良くよかった。現地に初めていって地震と津波によって荒涼とした風景を見て災害のひどさを感じた。大川小学校はV字型の校舎であのような校舎は見たことがないし、津波の爪痕も残っていて印象に残っています。

○福島浪江町、小高では立派な家があるのに今も住めていないのを目の前で見て原発事故がもたらした被害は計り知れないと思った。原発事故の処理もできないうちに原発の再稼働はとんでもない話だ。宮城県ではかさあげ工事が進んでない状況で復興はまだまだという感じだった。

○福島と宮城は人災と天災の違いを感じた。東北の震災を忘れてはならないためにも視察が必要だ。地元に戻らない人が多くいるかもしれないけども、復興させようと努力している人がいる。そういう人のためにも行って少しでもお金を使って潤すことが必要だと思う。今回は民宿を使って地元の人との交流ができたのは良かった。車を運転していて被災地ではカーナビに頼っていてはだめだということも分かった。

○福島では大きい立派な家があるのに住んでいないのを見ると異様に思います。住もうと思っても住めないのだから。福島と宮城では同じ被災地でも宮城の方は希望があるのが見えたけども、福島は希望が見えなかった。自分の出身は九州の川内原発の近くなのでこの8月に再稼働が始まりましたけども、もし事故が起こったら福島のようにになってしまうのではないかと不安です。事故が起これば自分の田舎に帰れなくなってしまうと思う。川内原発を再稼働させたのはショックですね。

○浪江町の放射線量を量ってみると怖いと思った。原発事故の原因も分からず収束もしていないのに原発を再稼働するのはおかしい。地震と津波があった年に福島に入ることはできなかったけども、東北の海岸沿いに車を走らせて女川にもいった。あの時には田んぼに船が乗り上げていて海岸もひどいものだった。これからは被災地の生業を応援していくことが必要だと思う。観光にいつか宿に泊まるのも支援のひとつなので続けていくべきだと思う。

(女川駅前・2015年9月26日)



(請戸小学校の校内1階2015年9月25日)



このように今回の東北被災地への視察と観光は勉強になったことが出されました。これらの声を踏まえて今後も様々な形で東北被災地の支援を続けていきたいと思えます。安倍首相は「被災地の復興なしに日本の再生はありえない」と言っていますが、やっていることは復興予算の流用にみられるように被災者の声に応えたものになっていません。先の国会では憲法違反の戦争法(安保法制)を強行採決し軍事予算の増大、原発の再稼働、沖縄の辺野古新基地建設の強行にみられるように被災者や国民のことよりもアメリカや財界、軍事産業、原発産業に目を向けた政治を行っています。労働者にとっても残業代ゼロ法案等の労働法制を労働者派遣法に続いて次の国会で改悪しようとしています。郵政の職場でも株式が上場されたことから利益第一主義が追及され超過密労働とコスト削減、お客様へのサービス低下が予想されます。政治や社会の動き、職場の動きも根元は一緒です。そうした観点から被災者、国民、働く者に犠牲を強いる暴走政治は許さない取組みを大きくしていく必要があります。そのためにも要求や声をあげる仲間の輪を大きくしていきましょう。

(浪江町中心街で2015年9月25日)

(請戸小学校の校内1階2015年9月25日)



(追記)

東電がこれだけの原発事故を起こしているのに当該の労働組は何をやっているのでしょうか。原発事故があった後の新聞投書欄に東電労組が原発の再稼働を求めていることに怒りの記事が載ったことがありました。原発事故で原発の稼働を中止していることに東電労組は再稼働することを求めたことへの怒りです。本来の労働組合はそこに働く労働者の生活と権利、国民の利益のためにたたかっていくことが求められています。以前の電力労組は今のように分割されていなかった時代に本来の労働組合の役割を果たす活動を行っていました。それが会社の分割によって東電、関西電力等はたたかう労働組合を敵視し、労働組合の活動の担い手に対する徹底した差別、思想信条による差別、昇任昇格差別等が行われ現在の労使一体化路線をすすめる労組に変わっていったのです。会社がすすめた労働者への分断政策は会社の言いなりになる労働組合に変質させることが目的だったのです。現在では労働組合の役員を行えば会社の役員になるルールが敷かれています。東電労組が東電の意向にそって原発の再稼働を求めていくというのは歴史的経過からいっても当然の帰結なのです。今、労働組合はあっても労組としての活動が停滞していることから様々な問題が起こっています。そういう点から言っても郵政の職場では郵政産業ユニオンの役割は大きくなっています。